魅力ある学校づくりと学校経営

前フランクフルト日本人国際学校　教頭
高知県高知市立城東中学校　教頭　成　岡　　浩

キーワード：国際理解、現地理解、学校行事、学校経営、経営改革

1．はじめに

この原稿を書いている現在、私は３年間の海外勤務を平成27年３月に終えて帰国し、地元の中学校に戻って奮闘している。帰国後の４ヶ月は、海外派遣の３年間を振り返る間もなく過ぎ去った感じであるが、フランクフルト日本人国際学校での３年間は、それ以上に一瞬の出来事であり、あっという間であったとつくづく思う。今回、寄稿の機会をいただき、私の体験を振り返り伝えることで、未来の派遣教員を目指す先生方の少しでもお役に立てればと思う。私が経験した実体験を紹介することで、日本全国で活躍する意欲に満ちた教職員の皆様に在外教育施設での「やりがいある教育活動と学校経営」を少しでもお伝えできれば幸いである。

2．フランクフルト市

本校があるフランクフルト市は、北緯50度と高緯度に位置するにもかかわらず、西岸海洋性気候であるため、比較的温暖で暮らしやすい。本市はヨーロッパのほぼ中央に位置し、昔から市民が治める町として発展してきた。フランクフルトの最大の自慢は、ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテとアンネ・フランクが生まれ育った町であるということだ。また、古くから金融の街として発展しており、2002年１月から導入されたヨーロッパ単一貨幣ユーロの流通センターとして、ヨーロッパ中央銀行の所在地としても世界の脚光を浴びている町である。さらにヨーロッパのハブ空港としてもドイツを代表する国際都市である。４人に１人が外国人であり、欧州最大の商業都市ではあるが、美しい森に覆われた山々の間に位置し、緑豊かな自然に恵まれた都市でもある。

3．フランクフルト日本人国際学校

本校は1985年４月、共益法人フランクフルト日本人国際学校として開校し、昨年度で創立30周年を迎えた。開校当時は59名の児童生徒が在籍し、２つの校舎を間借りしていた。昨年度、30周年記念誌を作成するにあたり、本校に在籍した多くの皆様にご協力を頂き、創立当時の「産みの苦しみ」を改めて知ることが出来た。当時は、小学校と中学校の間借り校舎でスタートし、その校舎は離れていて、事務職員であった方が車で１日に何度も教員を運んだこと、教材がほとんどなく手作りだったこと、特に英語教育にレベルの差があって、その教材に工夫されたこと、テスト作成の苦労のことを知ることが出来た。学校教育目標である「一生懸命学習しよう」「異なったものを認めよう」「豊かな心と感謝の気持ちを育てよう」「たくましい身体と心をつくろう」の目標に、創立当時から教職員が一丸となって未来の国際社会で活躍する児童生徒の育成に努力したことが伝わってきた。

そして、1989年に現在の校舎がハウゼン地区に完成する。1989年といえば、歴史的な「ベルリンの壁崩壊」が起こり、翌年に東西ドイツの再統一が実現する。そんな激動の時代を本校は、ドイツと共に歩んできたといえる。30周年記念誌作成を通して連絡をさせていただき、またご本人と直接お目にかかる機会を得ることが出来た皆さんそれぞれに本校への熱い思いが伝わってきて、応援していただいていることを強く感じた。

本校は、平成26年度４月当初に250名の児童生徒でスタートした。児童生徒の転出入が激しい学校ではあるが、児童生徒数は250名から260名で安定推移している。これは、これまでご尽力いただいた教職員や保護者の努力をはじめ、市当局の支援及び本校に関わっていただいた交流校、体験学習等でお世話になっている多くの皆様の継続した支えがあってのことである。私が勤めた３年間は、それを大いに実感した。学校経営を担う一人として、大変有り難く心強く思えたことである。

4．父母の会

本校には、最も心強い協力者がいる。それは保護者で組織する「父母の会」である。日本で言うPTAであるが、それとはやはり違う存在であると私は感じている。本校では、ドイツの習慣に習い、小学4年生まで保護者の送迎を義務付けていて、毎日、児童を送り迎えするために保護者は学校へ足を運ぶ。特に下校時のお迎えの時間は、お母様方がホールでお喋りをしながら、子どもたちが教室から降りてくるのを待っている。外国に暮らしていると近所に日本人はいない。同じクラスの母親同士が仲良く、楽しそうにお喋りしている風景は、微笑ましくさえ感じる。時にその声が大きくなり、まだ授業中のため注意をしなければならない場面もあるが、日本語で会話できる大切なひと時である。

父母の会は、各学級から2名の学級役員が選出され、各学級のお世話をしていただく。また、月に1度の役員会があり、それぞれ分担をして、司会進行等を行う。この中から4役（会長、副会長、書記、会計）が選出され、その選出方法は、くじ引である。これは学級役員に選出された保護者で行う。役員にとっては、年に一度のハラハラドキドキのくじ引となる。4役になると責任重大であり、注目される存在となる。それがくじ引きで決まることに驚きもあったが、どなたがなってもしっかりと役割を果たしていただけた。そこが本校の「強み」だったと後々知ることになる。この父母の会の活動は、本校の子どもたちの教育活動に欠かせない。具体的には、各行事や現地校との交流活動等でのサポートをしていただく。全てボランティアである。例えば小学部で実施している水泳教室の引率がある。小学部低学年では、危険防止の対応以外に、着替えからロッカーへの荷物入れ、具合が悪くなった児童の対応とその役割は重要である。これは少ない教員での引率のためと学校にプール施設がないために時間の制約があり、協力をお願いしている。その他にも本校にはたくさんの行事や取り組みがあり、その都度父母の会の主体的なボランティアに協力いただいている。特に、大きな行事として学校祭がある。本校の学校祭は2日間に渡って行い、1日目は児童生徒のステージ発表、2日目には学級発表と父母の会が主催するバザーがある。このバザーは、子どもたちを楽しませることが目的で考えられたゲームや手作りお菓子、普段は手に入らない日本のお菓子や雑貨、お母様方がつくったプロ級の手作り小物、日本文化を紹介するそれぞれのコーナーがある。私が着任する前年までの学校祭は、子どもたちが主体というよりもフランクフルトでの日本人のお祭りという色合いが強かったようである。これを「子どもたちが主人公」の学校祭に変えていくため、学校長や当時の父母の会会長をはじめ、教職員と共に改革を行った。実質的に規模縮小の方向性に学校祭運営への批判や苦情はあったが、それを乗り越え子どもたちが主人公の学校祭が実現できた。これまでを見直し、新たなものにしていく苦しみはあったが、目的を達成できたと思う。この決断に踏み切り、実行した父母の会会長には心から感謝をしている。これを機会に2年目、3年目は大変スムーズな学校祭の運営と大きく負担軽減が出来たと思う。学校祭を親子そろって楽しめる、子ども主体の本来の姿になったと思う。

父母の会の協力は、それだけではない。昨年度で創立30周年を迎える本校は、図書の充実を目指して、図書館整備に力を入れた。これまでも父母の会の協力を得て、図書館運営の一部をお願いしてきたが、児童生徒にとって利用しやすい図書館への改革に父母の会の有志20名が集まった。当初は、2~3名の有志ボランティアを想定していたが、募集をかけたところ、20名もの方々が手を挙げてくれた。これはあくまでも父母の会の活動ではなく、これまで停滞していた図書館運営を改善しようと呼びかけた結果である。予想外の人数が集まったため組織化する必要があったが、その中から数名のリーダーが生まれ、献身的にお世話いただいた。本の整理や登録、廃棄をはじめ、絵を描いたり、折り紙を飾ったり、母親の目線から子どもたちに本を読んでもらいたい思いあふれる工夫がいたる所に作られた。時に机の配置で意見の違いも出たが、それも子どもたちにとって良かれと思う心がこめられていた。その気持ちこそが嬉しい事である。30周年を境に図書室が明るく機能的に変貌したのは、献身的に仕事をしていただいた父母の会有志の方々のお蔭である。この父母の会の存在は、本校運営にはなくてはならない存在である。

5．国際理解・現地理解教育

本校の特色ある教育活動は、当然ではあるが国際理解教育と現地理解教育である。本校での教育活動はドイツで暮らす児童生徒にとって、「活動することによって学ぶ」ここでしかできない貴重な機会となっている。その活動は沢山あり、全てを紹介したいところだが、ここでは私が同行した最も印象深い取り組み２つを紹介する。

（1）フレック農場での体験学習

フレックさんの農場で体験学習

毎年、小学部３年生が農作物の学習でお世話になっているのが、フレックさんである。フレックさんはすでに引退され、経営していた広大な農地は後継者に任せ、ご自身は沢山あるドイツの学校の子どもたちを招いて農場見学や穀物の学習に貢献しているという素晴らしい人物である。本校もその１つの学校として、フレックさんご夫妻さんのご好意にて、学習の機会をいただいている。昨年は、穀物をテーマとして、具体的には小麦や大麦、日本ではあまり見たことのない麦の種類を実際に見て、触って、学習した。その後、トラクターにひかれる荷車の藁の座席に皆で座って、麦畑の中をゆっくりと走る。その晴れ渡った空と広々とした大地を、トラクターに揺られ、皆で歌を歌いながら畑に向かう。畑の中にある納屋に置いてある最新の巨大なトラクターは１台5000万円程だと聞いて驚き、一人ひとりがその運転席に座って歓声を上げる。見て、触って、乗って、目を輝かせて学習する子どもたちの姿はまさに貴重な体験学習である。お礼と言っては何だが、毎年本校で行う運動会と学校祭へフレックさんご夫妻をご招待している。このつながりこそが、本校の財産であり、強みであると思う。人のつながりは、本当に大切である。

（2）ぶどう収穫体験学習

ぶどう収穫体験

毎年、中学部１年生がリューデスハイムの葡萄畑に行き、葡萄収穫をするドイツならではの体験学習である。フランクフルト中央駅からリューデスハイムまではドイチェバーン（ドイツ鉄道）で片道１時間ほどの電車の旅である。駅に着くと毎年お世話になっているラウターさんにお出迎えいただき、所有する葡萄畑までご案内いただく。広大な葡萄畑の坂道を登りながら、眼下にゆったりと流れるライン川を観る。この川沿いの斜面がドイツワインの名産地である。この素晴らしい景色の中、手摘みでぶどう収穫を行う。時間に制限があるため、１時間ほどの収穫体験ではあるが、生徒たちは一生懸命、大事に葡萄を収穫する。収穫後は畑の横で葡萄畑とライン川の景色を見下ろしながら皆でお弁当を食べる。この取り組みは話を聞くだけだと、その良さは伝わらないようである。その場に行ってその風景を観て、実際に葡萄を収穫した人だけが味わうことが出来ると思う。本校だけが実行できる貴重な体験学習であると思う。畑から降りて、ワインを製造している作業所でしぼりたての葡萄ジュースを味見させてもらい、貯蔵庫のケラーを見学して帰校する。この濃密な１日は、本校の中学１年生に在籍した生徒のみが味わえる実体験である。このつながりと機会を大切にしたい。

6．巡回指導

文部科学省からの指示もあり、本校は補習授業校の先生方に授業指導を行うため、６名の教員を派遣している。平成24年度からは、ハイデルベルク日本語補習校へ１名、年に２度の派遣を開始し、昨年度で３年が経過した。それまでは例年、本校の校舎を利用して、毎週土曜日に行っているフランクフルト補習授業校に５名、年に２度の派遣を行っていた。補習授業校を具体的にいうと、普段は現地の学校に通い、ドイツ語または英語で学習している子どもたちが、土曜日だけ日本語を学びに集まる学校である。実際は両親のどちらかが日本人であり、日本

語を学ばせたい気持ちが強い家庭の子どもたちが多い。というのは、現地の学校に通う子どもたちにとって土曜日は、友達と遊びたい休日である。それを返上して、日本語や日本の文化を学びにあえて集まるのである。補習校も近くにあるわけではなく、そこには親の努力が当然必要であるため、遠くても毎週通うのである。はっきり言ってドイツ語だけで暮らせるここドイツで、あえて難しい日本語を学びに通う子どもの気持ちはどうだろう。そんな子どもたちの学習の場面を何度か見る機会があった。ドイツと日本の習慣の違いから、本校の施設の使い方で注意を促すこともあったことは事実だが、一様に子どもたちは真面目に授業に向かい、それぞれが一生懸命な姿をそこに観た。風貌は、やはり日本人離れした部分がたくさんあり、日頃はドイツ人と共にドイツの習慣の中で暮らしている子どもたちである。まさにこの子どもたちは、未来の国際社会で活躍するだろう国際児である。本校では毎年 6 月に開催されるフランクフルト運動会で、補習授業校児童生徒との合同運動会を開催している。合わせると 500 名を超える児童生徒数となり、当日はご両親やこの日に合わせて日本から祖父母の皆様にもお越しいただく。補習授業校とのつながりは大切な本校の財産である。

7．海外医療財団の支援

本校は、保護者や地域の皆様から多大なご協力を頂き成り立っているが、日本からも大変有り難い協力を頂いている。ここでは特に毎年お越しいただいている医療財団のご支援について記録しておく。私が着任する平成 24 年度、前任との引継ではこの制度の打ち切りがあるかもしれないと聞いていたが、私が勤務した 3 年間は毎年お越しいただけた。具体的には毎年 11 月末の 2~3 日の日程で、3 名の歯科・発達相談のお医者様と部長様をお迎えし、本校及び幼稚園、補習授業校の児童生徒に診察・相談をしていただく。医療に関しては、発展途上国にある在外施設の方が、是非来てほしいであろうと確かに思う。ヨーロッパの環境は、まだ良い方だというのは事実であるが、ここフランクフルトでも日本語で相談できる医療機関を待ち望んでいる。特に子どもの歯については、毎年来ていただいている歯科医の先生からは、状態が良くないとのご指摘を受けている。それはやはり言葉の問題もあって、医者に行かない現状がある。さらに発達相談においては、海外において日本のような相談機関がない事、あってもそこには言葉の大きな壁があると言える。年々、相談数が増加し、出来るだけ多くの皆さんに相談を受けてほしいと本校の担当者会で検討し、その運営に努力してきた。昨年は、特に発達相談の希望者が増え、一人ひとりの持ち時間を削って希望者全員を何とか行った。希望者多数のため、締め切り後のお申し込みはすべてお断りするなど、この件については様々課題が残る。当然、日本と同じようにはできない海外に暮らす悩みであるが、誰もが抱える医療の不安を解消してくれるこの医療財団の取り組みは、非常に有り難く感謝すべき活動である。この活動は本校のみでなく、世界に広がる日本人の支えになっていると心から感謝の意を表したい。

8．おわりに

冒頭にも書いたが、在外教育施設での 3 年間は本当に短い。24 年前に私は、シンガポール日本人学校に 3 年間派遣していただいた。その時のやり残した思いもあって、再び 50 歳での挑戦を実行し、実現したのが今回の派遣である。フランクフルトでの 3 年間は大変充実していて、私にとっては本当に貴重な体験であった。これも私を支えてくれた多くの皆様のお蔭であり、感謝の気持ちでいっぱいである。今回も仕事の面で心がけたことは、協調性を持って自分の仕事に徹するということである。今回、私自身が十分に使命を果たせたか、もっとやれたことがあるのではと帰国して今さらながらそう思う。帰国して 4 カ月が経った今、お役に立てることがあれば、出来るだけのことをするのが使命であると改めて思う。残された教員生活はあとわずかであるが、まだできることはあるように思う。未来の派遣教員の皆様には大いに期待している。是非挑戦してほしい。